

■ 大学における研究と地域産学交流センター

新潟工科大学学長 布村 成具



大学の教員は教育の質を確保するために研究という形の自己研鑽を続けなければなりません。

研究には《基礎原理の追求》

と《実用化の検討》の2つの側面があります。《実用化の検討》のみを追求するものは様々な発明により社会に貢献したエジソンにちなんでエジソン型研究と呼ばれます。しかし、教員の自己研鑽には《基礎原理の追求》が不可欠で、工学部の研究は両者を併せて行うものでなければなりません。これは微生物の概念を提唱し、発酵法を確立して工業にも貢献したパスツールにちなんでパスツール型研究と呼ばれています。

工学部で必然的に行われている研究の内での《エジソン型》の部分は産業の種《シーズ》となるもので、これが地域の要望《ニーズ》と一致するならば、大学にとっても地域にとっても大変幸福なことであります。産業界の多くの方々にはエジソン型を望まれていると思いますが、パスツール型はエジソン型と矛盾するものでないことをご理解いただくと幸いです。

これらの《シーズ》も《ニーズ》も固定的なものではなく、制約はありますが話し合いによって一致点を見出すことが出来ると考えられます。また教員の専門の範囲内ならば新しい《ニーズ》を自己研鑽の研究課題として選ぶことも出来ます。

新潟工科大学の《シーズ》を発信して地域の《ニーズ》を探し、その一致点を見出すことに役立つことが新潟工科大学地域産学交流センターの役割です。ご支援をお願い致します。

■ 発刊にあたり

新潟工科大学地域産学交流センター
センター長 佐伯 暢人



地域産学交流センター広報誌第1号をご覧頂き、誠にありがとうございます。本広報誌は新潟工科大学における共同研究の事例や各教員

が保有する最新の技術を多くの企業の皆様にご紹介することを目的として発刊されました。

本学ではこれまでに、平成10年に「地域産学交流センター」を産学交流の窓口として設置し、企業からの産学交流に関する受け入れ体制の整備を図ってきました。その結果、企業の皆様から年間60件あまりの技術相談や共同研究を行うに至っております。しかしながら、産業界や地域の皆様には本学の産学交流事業を未だ十分にご理解頂いていないということも痛感しております。そこで、地域産学交流センターでは今年度、次の3つの事業を通して、本学の産学交流に関する様々な情報を発信しています。

> 本広報誌の発刊

> 上越地域産学技術交流会(4頁参照)

> 新潟工科大学・産学交流会連携フェア(8頁参照)

産学交流による本学への効果は計りしれません。共同研究を行うことで、それに携わる学生の勉学に対する意欲は向上し、教員がレベルアップできるということは私自身が身をもって体験してきた事実です。また、良い結果が得られたときの企業の方々の笑顔は私たちにとって、忘れることのできない喜びです。

本広報誌を通して、産業界や地域の皆様との連携が少しでも増えることができれば幸いです。